

フィギュアスケート観戦者に関する研究 : NHK杯の観戦者に着目して

| | |
|-----|---|
| 著者 | 井上 尊寛, 竹内 洋輔, 荒井 弘和 |
| 出版者 | 法政大学スポーツ健康学部 |
| 雑誌名 | 法政大学スポーツ健康学研究 |
| 巻 | 5 |
| ページ | 27-31 |
| 発行年 | 2014-03-30 |
| URL | http://doi.org/10.15002/00009673 |

フィギュアスケート観戦者に関する研究
—NHK杯の観戦者に着目して—
A Study on Spectators of Figure Skating.
—Focus on the spectators of NHK Trophy.—

井上 尊寛¹⁾、竹内 洋輔²⁾、荒井 弘和³⁾

Takahiro Inoue, Yohsuke Takeuchi, Hirokazu Arai

[要旨]

本研究は、NHK杯国際フィギュアスケート競技会にて調査をおこない、フィギュアスケート観戦者の観戦行動およびフィギュアスケートの採点基準から観戦者が重要視するコア・プロダクトの構成因子を設定し、測定を行った。結果からは、ジャンプやスピンといった技術的な要素よりも、スケーティングや音楽との調和などの芸術的な要素を重要視する傾向がみられた。また、観戦者は女性の構成比が高く、国内で開催されている国際大会の観戦はしているが、国内競技会への観戦頻度は高くないことが分かった。これらのことから、音楽との調和や優雅さ、審美性などの美的要素に着目したプロモーションや、スコアの低かった因子についての理解を促すプロモーションの有用性が示唆された。

キーワード：フィギュアスケート、ルールの理解、回遊行動

1. はじめに

2014年2月に冬季オリンピックがソチにて開催された。その中でも特に関心が高いのがフィギュアスケートであろう。代表選考である日本フィギュアスケート選手権はゴールデンタイムに2日間に渡り放送されている。その他日本国内で行われている国際競技大会の多くは地上波にて放送されている。他の冬季競技よりも露出が多く、社会的な関心も高いことが伺える。

また、フィギュアスケートを対象とした調査および研究は、そのメディア価値の高さや社会的な関心と反して、我が国のみならず海外の研究においてもほぼみられない。特にスポーツビジネスの領域においては全くと言ってよいほど対象とされ

ていない。

これまで下位カテゴリーを対象とした調査・研究（井上ら, 2012; 井上ら, 2013）をおこなってきたが、本研究では、最上位の競技会であるNHK杯国際フィギュアスケート競技会（以下：NHK杯）の観戦者を対象とした調査・研究を行った。

国際スケート連盟（ISU: International Skating Union）は、フィギュアスケートの国際競技会として、世界選手権（World Figure Skating Championships）、世界ジュニア選手権（World Junior Figure Skating Championships）、ヨーロッパ選手権（European Figure Skating Championships）、四大陸選手権（Four Continents Figure Skating Championships）、ISUグランプリ（ISU Grand Prix of Figure Skating）、

1) 法政大学スポーツ健康学部

2) 法政大学スポーツ健康学部兼任講師

3) 法政大学文学部心理学科准教授

ISUジュニアグランプリ (ISU Junior Grand Prix of Figure Skating) を主催している。

本研究の対象としたNHK杯は、ISUが主催するISUグランプリ全6戦の中の1つである。このグランプリの競技会の出場者は、前年度の世界選手権上位者、前年度までのWorld Standing上位24名、前年度のシーズンベストスコア上位24名、その他一部競技会の優勝者から、グランプリ開催国が招待する選手が決定されている。選手はグランプリ6戦のうち、最大2戦まで招待され、全6戦の上位6名がグランプリファイナル (Grand Prix Of Figure Skating Final) に出場する事ができる。

すなわちNHK杯は競技力を持った選手が招待され、グランプリファイナルの出場権をかけて戦う、国際大会の中でも最上位の競技会の一つである。

本研究では、ビジネスの領域においても価値の高いコンテンツであると認識されているフィギュアスケートのイベントの集客戦略及びマーケティング戦略策定のための情報収集および分析を目的とした。

2. 研究の方法

2.1 研究セッティング

本研究は、2013年11月8日～11月10日の間に国立代々木競技場第一体育館にて開催された、2013NHK杯国際フィギュアスケート競技大会の観戦者を対象とした。

2.2 データの収集

観戦者の特性およびルールを理解状況および観戦者が重要性しているコア・プロダクトを構成する因子についての評価を測定するため、観戦者を対象としたアンケート調査を実施した。調査員はスポーツマネジメントを専門とする大学生19名であり、全員が調査に関して十分な事前指導を受けた。データ収集は層化抽出により、各調査員が担当したエリアに来場した観戦者の男女比および年齢構成比を観測し、標本を抽出した。調査員は競技会開始前、競技会の休憩時間に579票を配布し、574票

を回収した。回収率は99.1%であった。

2.3 調査項目の設定

観戦者が重要性しているコア・プロダクトを構成する因子の設定については、複雑なルールの理解が観戦満足の要因となることが示されたことから、採点基準を基にコア・プロダクトの構成因子を設定した。すべての項目は各因子の重要性について5段階尺度 (5: おおいに当てはまる～1: まったく当てはまらない) にて回答を得た。

具体的にはISUジャッジングシステム (ISU Judging System) における審判員の採点基準から項目を設置した (Figure. 1)。質問項目の①～④はテクニカル・パネル(技術認定役員)が判定しているものに関して、設定をした。質問項目⑤はジャッジパネルが採点している、技術要素の出来栄から設定した。質問項目⑥～⑨はジャッジパネルが採点している演技構成点の項目 (参照プログラムコンポーネンツ通覧) から、(観戦者からは評価がしづらい) トランジション/つなぎとフットワークの部分だけ排除し、項目として設定した (竹内, 2007)。

3. 結果

3.1 基本的特性

Table 1.は調査対象者の基本的属性を示したものである。観戦者については女性の構成比が高く、86.2%であった。平均年齢は43.3歳で、40歳以上49歳未満の構成比が最も高く (32.6%)、次いで50歳以上59歳未満であった (23.5%)。同伴者の規模は平均2.0人で、友人と会場に来場する割合が最も高く (41.5%)、次いで家族 (32.9%)、ひとり (27.1%) であった。応援している選手の有無を問う項目では「いる」と回答したものは88.6%であり、平均の応援歴は約8.9年であり、応援歴は7-8年と回答した者の構成比が最も高く (29.0%)、次いで11年以上 (17.1%)、5-6年 (16.9%) であった。観戦者の競技経験は、未経験者が93.3%であり、やっている (3.6%)、もしくは過去にやっていた (3.2%) と回答する者の構成比は低かった。

| 点数 | スケーティングスキルの特性 (SS) | トランジション/フットワークと動作の特性 (TP) | パフォーマンス/エクスキュージョンの特性 (PE) | コレオグラフィー/コンポジションの特性 (CH) | 音楽のインタープリテーションの特性 (IN) |
|--------|--------------------|--|---|--|---|
| 傑出 | 10 | ・多様さ ・難しさ ・複雑さ ・質 ※シングル、ペア競技においては、技術要素の入り方と出方を含む | ・肉体的、情緒的、知的 かかわり ・身のこなし ・スタイルと個性 ・動作の明確さ ・多様さと対照性 ・投射 | ・目的 (アイデア、コンセプト、ビジョン) ・比率 (部分部分の重みの均衡) ・統一性 (意図のある結合) ・個人的、公的な空間利用 ・パターンと表面利用 ・フレージングとフォーム (動作、部分が音楽のフレーズに調和して構成されていること) ・目的や動作やデザインの独創性 | ・音楽に合った楽々とした動作 (タイミング) ・音楽のスタイル、特徴、リズムの表現 ・音楽のニュアンスを反映したフィネスの使用 |
| 卓越 | 9 | | | | |
| 非常によい | 8 | | | | |
| 良い | 7 | | | | 約75%を満たす |
| 普通より良い | 6 | | | | |
| 普通 | 5 | | | | 約50%を満たす |
| まあまあ | 4 | | | | |
| 弱 | 3 | | | | 約25%を満たす |
| 劣る | 2 | | | | |
| 非常に劣る | 1 | | | | |

Figure 1 フィギュアスケートにおける採点基準

竹内洋輔 (2007) フィギュアスケートの新しい採点システム問題点 —2006年度グランプリシリーズ・男女シングルフリー・スケーティングを例として、スポーツ運動学研究、20: pp. 69-81

Table 1 基本的特性

| | | n | % |
|-------------------------------------|----------|-------|-------|
| 性別 | 男性 | 79 | 13.8 |
| | 女性 | 492 | 86.2 |
| | 合計 | 571 | 100.0 |
| 同伴者(M.A.) 平均同伴者数 2.0人 標準偏差1.1 | ひとり | 155 | 27.1 |
| | 友人 | 237 | 41.5 |
| | 家族 | 188 | 32.9 |
| | その他 | 15 | 2.6 |
| 年齢 平均年齢 43.3歳 標準偏差 11.3 | 19才以下 | 7 | 1.2 |
| | 20代 | 67 | 11.7 |
| | 30代 | 108 | 18.8 |
| | 40代 | 187 | 32.6 |
| | 50代 | 135 | 23.5 |
| | 60才以上 | 70 | 12.2 |
| | 合計 | 574 | 100.0 |
| 競技歴 | 過去にやっていた | 19 | 3.6 |
| | 現在もしている | 17 | 3.2 |
| | やったことはない | 499 | 93.3 |
| | 合計 | 535 | 100.0 |
| 応援している選手 | いる | 468 | 88.6 |
| | いない | 60 | 11.4 |
| | 合計 | 528 | 100.0 |
| 応援年数 平均応援年数 8.9年 標準偏差6.9 | 2年以下 | 31 | 5.9 |
| | 3-4年 | 81 | 15.4 |
| | 5-6年 | 89 | 16.9 |
| | 7-8年 | 153 | 29.0 |
| | 9-10年 | 83 | 15.7 |
| | 11年以 | 90 | 17.1 |
| 合計 | 527 | 100.0 | |

本研究は、観戦者が重要性しているコア・プロダクトを構成する因子についての評価を測定することを目的としている。評価基準は競技の採点基準の各要素から設定した。観戦者が重要視している要素は、音楽との調和が4.46と最も高く、次いで姿勢や綺麗さの評価で4.39、振り付けの評価が4.36、スケートニングに関する評価で4.34であった。ジャンプやスピンといったメディアでも注目される要素についての重要性というよりは、審美性や芸術性といった要素を重要視する傾向がみら

れた (Table 2)。

因子間の相関関係については、全ての因子間で有意な関連がみられた。また、総じて各因子間で強いもしくは中程度の相関がみられた (Table 3)。

Table 4 は昨年度の国内で開催された主要な競技会の観戦における回遊行動を示したものである。特に多くの観戦者が国際競技会を観戦していることがわかった。また、国内競技会に関しては、全日本選手権以外の競技会の観戦が極端に低くなっていることがわかった。(Table 4)

Table 2 パフォーマンスの構成要素と重要性

| | 度数 | 平均値 | 標準偏差 |
|-----------------------------|-----|------|------|
| ① ジャンプの種類の違い | 514 | 3.94 | .987 |
| ② ジャンプの回転数の違い | 512 | 4.05 | .943 |
| ③ スピンの種類の違い | 512 | 3.70 | .981 |
| ④ スピン中の姿勢と難度 | 510 | 4.02 | .884 |
| ⑤ ジャンプ・スピン・ステップの出来栄に関する評価 | 513 | 4.25 | .836 |
| ⑥ スケートニング技術に関する評価 | 512 | 4.34 | .825 |
| ⑦ 振り付けに関する評価 | 512 | 4.36 | .769 |
| ⑧ 音楽との調和に関する評価 | 514 | 4.46 | .752 |
| ⑨ パフォーマンスや姿勢・スタイルの綺麗さに関する評価 | 512 | 4.39 | .786 |

Table 3 各因子間の相関関係

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
|-----------------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|---|
| ① ジャンプの種類の違い | 1 | | | | | | | | |
| ② ジャンプの回転数の違い | .764 | 1 | | | | | | | |
| ③ スピンの種類の違い | .723 | .651 | 1 | | | | | | |
| ④ スピン中の姿勢と難度 | .570 | .623 | .662 | 1 | | | | | |
| ⑤ ジャンプ・スピン・ステップの出来栄に関する評価 | .558 | .621 | .525 | .734 | 1 | | | | |
| ⑥ スケートニング技術に関する評価 | .552 | .553 | .502 | .663 | .756 | 1 | | | |
| ⑦ 振り付けに関する評価 | .301 | .311 | .309 | .395 | .443 | .496 | 1 | | |
| ⑧ 音楽との調和に関する評価 | .296 | .287 | .322 | .388 | .452 | .539 | .831 | 1 | |
| ⑨ パフォーマンスや姿勢・スタイルの綺麗さに関する評価 | .264 | .288 | .280 | .337 | .404 | .442 | .737 | .749 | 1 |

すべての因子は 1% 水準で有意 (両側)

Table 4 2012年度国内競技会における回遊行動

| | 競技会名 | n | % |
|------------------------------|---|--------------|------|
| 国内競技会 | 2012 関東フィギュアスケート選手権大会 | 3 | 0.8 |
| | 2012 中部フィギュアスケート選手権大会 | 12 | 3.0 |
| | 2012 東京フィギュアスケート選手権大会 | 25 | 6.3 |
| | 2012 近畿フィギュアスケート選手権大会 | 5 | 1.3 |
| | 2012 中四国九州フィギュアスケート選手権大会 | 3 | 0.8 |
| | 2012 東北・北海道フィギュアスケート選手権大会 | 2 | 0.5 |
| | 第6回西日本学生選手権大会 | 5 | 1.3 |
| | 第6回東日本学生選手権大会 | 11 | 2.8 |
| | 第16回全日本フィギュアスケートノービス選手権大会 | 8 | 2.0 |
| | 第38回西日本フィギュアスケート選手権大会／第29回西日本フィギュアスケートジュニア選手権大会 | 6 | 1.5 |
| | 第38回東日本フィギュアスケート選手権大会／第29回東日本フィギュアスケートジュニア選手権大会 | 14 | 3.5 |
| | JOCジュニアオリンピックカップ大会 第81回全日本フィギュアスケートジュニア選手権大会 | 23 | 5.8 |
| | 第81回全日本フィギュアスケート選手権大会 | 140 | 35.4 |
| | 第19回全日本シンクロナイズドスケート選手権大会 | 3 | 0.8 |
| | 国際競技会 | メダルウィナーズオープン | 85 |
| ジャパンオープン | | 162 | 40.9 |
| ISUグランプリ NHK杯国際フィギュアスケート競技大会 | | 179 | 45.2 |
| 四大陸選手権大会 | | 188 | 47.5 |
| 世界フィギュアスケート国別対抗戦 | | 222 | 56.1 |

4. 考察および結論

本研究は、国内のフィギュアスケート競技会の最上位のカテゴリーである大会にて、観戦者の特性の把握および、観戦者が重要性しているコア・プロダクトを構成する因子の評価について把握すること、競技会の回遊行動を把握することを目的とした。

得られた結果からは、観戦者の多くが女性であり、競技歴はほぼなく、2人前後で来場する割合が高いことが示された。また、応援する選手を持つ者が多く、応援歴も7-8年と回答する者の構成比が最も高かった。一方で、2年以下の新規層が来場する割合が低く、会場が定まっていないフィギュアスケート競技会においては、ファン歴の長い者の観戦頻度が高い傾向がみられた。

また、パフォーマンスの因子にては、メディアでも注目されがちな、ジャンプの回転数やスピンの種類などを重要視しているというよりは、スケートティングの出来栄や振付け、音楽との調和などの芸術的な要素を重要視する傾向が示された。また、審美性を評価している要素間とジャンプやスピンといった技術的な要素間での相関関係が強いことから、フィギュアスケートのパフォー

ーマンスは、技術的な側面と、審美的な側面に区分することができ、審美性を重要視する割合が高いことから、女性特有の競技に対する需要が存在していることが示唆された。また、総じてパフォーマンスの重要性を測る因子において評価が高いことも特徴として挙げられる。

回遊行動においては、国内における国際大会への観戦の割合が高く、国内競技会への観戦はあまりしていないことが分かった。

参考文献

- 1) 井上尊寛、竹内洋輔 (2012) フィギュアスケート観戦者の特性に関する研究.法政大学体育・スポーツ研究センター紀要、30:pp.63-66.
- 2) 井上尊寛、竹内洋輔 (2013) フィギュアスケート観戦者における観戦動機に関する研究.法政大学スポーツ健康学紀要、4 :pp.11-17
- 3) 竹内洋輔 (2007) フィギュア・スケートの新しい採点システムの問題点－2006年度グランプリシリーズ・男女シングルフリー・スケートティングを例として－, スポーツ運動学研究、20:pp.69-81